慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自由と負債 : カール・ ポランニー2.0の経済人類学
Sub Title	Liberty and liability in the economic thought of Karl Polanyi
Author	佐久間, 寛(Sakuma, Yutaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2018
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.140 (2018. 3) ,p.113- 145
JaLC DOI	
Abstract	Karl Polanyi is an economic historian representative of the twentieth century, whose works The Great Transformation and The Livelihood of Man influenced both the humanities and social sciences. Drawing on recent research trends referred to as "Polanyi 2.0," the present work will confirm various aspects of his thought that cannot be fully refuted by market economy criticisms. Recent research on Polanyi has found that the concept of "freedom" or "liberty" is fundamental to his theories of economic history, education, social philosophy, and war or social conflict. This concept addresses the construction of problems, with freedom representing "freedom from potential inconvenience and liabilities owed to others." While Polanyi never explicitly outlined a theory of liability, his discussion of it offers a variation on his theory of freedom and may have influenced the theories of liability that have emerged as subjects of interest in contemporary economic anthropology. Polanyi's theory of freedom is not based on the notion of the homo economicus, or an economic human who freely exchanges wealth and services with others, but on the so-called homo debitum, or a human whose existence is liberate the repayment of liabilities naturally owed to others. In the twenty-first century, when the world rests uneasy in the gap between globalism and chauvinism, a certain value must be found in the human image raised by the theories outlined in "Polanyi 2.0" research.
Notes	特集 : 人間科学 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000140-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自由と負債

――カール・ポランニー 2.0 の経済人類学

佐　久　間　　寛*

Liberty and Liability in the Economic Thought of Karl Polanyi

Yutaka Sakuma

Karl Polanyi is an economic historian representative of the twentieth century, whose works *The Great Transformation* and *The Livelihood of Man* influenced both the humanities and social sciences. Drawing on recent research trends referred to as "Polanyi 2.0," the present work will confirm various aspects of his thought that cannot be fully refuted by market economy criticisms.

Recent research on Polanyi has found that the concept of "freedom" or "liberty" is fundamental to his theories of economic history, education, social philosophy, and war or social conflict. This concept addresses the construction of problems, with freedom representing "freedom from potential inconvenience and liabilities owed to others." While Polanyi never explicitly outlined a theory of liability, his discussion of it offers a variation on his theory of freedom and may have influenced the theories of liability that have emerged as subjects of interest in contemporary economic anthropology.

Polanyi's theory of freedom is not based on the notion of the *homo economicus*, or an economic human who freely exchanges wealth and services with others, but on the so-called *homo debitum*, or a human whose existence is liberate the repayment of liabilities naturally owed to others. In the twenty-first century, when the world rests uneasy in the gap between globalism and chauvinism, a certain value must be found in the human image raised by the theories outlined in "Polanyi 2.0" research.

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

なんびとも社会から逃れることはできない．しかし，こう考えるからといってわれわれが自由を失うように見えるとしたら，それは誤解である．

（ポランニー 2015: 144）

人びとは債務を支払うべく生まれつき，また責務を履行すべく生まれついている．

（ポランニー 1998b: 567）

1　はじめに

カール・ポランニー（1886–1964 年）は，ハンガリー出身[1]，オーストリア，イギリス，アメリカで活躍した経済思想家である．代表作『大転換 *The Great Transformation*』（ポランニー 2009）は，自己調整的な市場を中心とした経済が特殊西欧近代的な構築物であったことをあきらかにし，社会主義体制の成立やファシズムの台頭といった近代史の諸相を市場経済にたいする社会の防衛運動として読み解いた作品である．また彼は，複雑な人間の経済的営みを市場交換による稀少な財の配分へと抽象化する既存の経済学を「形式主義 formalism」と批判し，人間の生の過程に根ざした「実体主義 substantivism」に基づく経済学を提唱した（ポランニー 1998a）．これにより，集団間の財の互酬的贈与や，中央集権的な政治機構による財の再分配を，市場交換と同様の経済過程と捉える研究視座が拓かれることとなった[2]．こうした着想は非西欧の微細な生活世界の研究を得意する文化人類学に影響を与え，「経済人類学 economic anthropology」という分野の確立を後押しした[3]．日本では，とりわけ栗本慎一郎の紹介により，1970 年代末から 80 年代にかけて脚光を浴びたことで知られる（栗本 1979）．

以上の人口に膾炙したポランニー像にたいし，本稿で検討したいのは，近年の研究によりあきらかとなったポランニー像，「ポランニー 2.0」（中山 2015）とも呼ばれる新しい像である．

くわしくは後述するように，近年のポランニーの再評価は経済史や社会思想史の分野を中心にすすみ，彼の経済人類学的研究は「ユートピア」的などと批判されることも少なくなかった（Humphreys 1969; Komoróczy 1990; 佐藤 2006）．そのためもあってか，人類学者による新たなポランニー研究の受容が十分に進んできたとはいいがたい．しかしながら，経済史・思想史の分野で蓄積されてきた新たなポランニー研究には，ポスト・コロニアリズムを経由した人類学にとってこそ重要な論点が含まれている．すなわち「自由 freedom, liberty」という論点である．本稿で見ていくように経済的自由主義の批判者として知られるポランニーは，その実「社会的自由」の積極的擁護者でもあった．そればかりか，この「自由」という主題を人類学的に探求することからは，いまだ十分に論じられていないポランニー思想の可能性を浮かび上がらせることができる．すなわち「負債 debt, liabirity」という領域の可能性である．

こうした問題意識に基づき本稿では，近年のポランニー研究をめぐる新しい動向をふまえて，ポランニー思想の多様性を確認するとともに，その根幹にある「自由」という問題を掘り下げて考察していく．以下では，第一に，ポランニー研究の近年の動向を学史的に整理する．第二に，2017年現在最新の論集である『経済と自由』（ポランニー 2015）[4] の読解に基づき近年の研究を通じてあきらかとなったポランニー思想の多様な内実を確認する．第三に，そうした多様なポランニー思想の根底に一貫する自由という問題を『大転換』をはじめとした近代西欧をめぐる論考を通じて検討する．第四に，議論の射程をポランニーの経済人類学的論考群にまで広げ，彼の自由論の根底に，生まれつき他者に負うがゆえに負債を返済することで自由となりえる存在という独自の人間像が控えていた可能性を指摘する．

2　学史の概要

ポランニー研究の新たな展開は，2000年代にはじまったとみて大過はな

い（笠井 2012: 101）．ただしその発端は，ポランニーの生誕から約 1 世紀をまたいだ 1987 年，カナダのコンコーディア大学に「カール・ポランニー政治経済研究所 Karl Polanyi Institute of Political Economy」が創設されたことにまで遡る．ポランニーは公刊物に限っていえば寡作だったが，死後に遺された講演原稿や講義録などの未公開資料は膨大な数にのぼり，同研究所が，これらの資料の保管と公開を担うことになった．これを機にポランニー研究の再興が国際的に生じ，『大転換』の新版公刊（ポランニー 2009）や新たな論集の編纂が各国で進められていく．その最大の成果がドイツ語の論集『大転換年代記』全 3 巻（Polanyi 2002–2005）であり，この論集に収められた未公刊テキストなどを編纂するかたちで，フランス語版や日本語版の論集が新たに編まれた（Polanyi 2002; ポランニー 2012）．さらにポランニーの没後 50 周年にあたる 2014 年に前後して，イタリアの研究者ジョルジュ・レスタとマリア・ヴィットリア・カタンザリティが未公刊テキストを中心に編纂し，イタリア語版，英語版，日本語版の順で公刊されたのが『経済と自由―文明の転換』（ポランニー 2015）である．

こうした研究潮流が進むにつれ，従来のポランニー像はすくなからず変化していった．とりわけおおきく見直されることになったのが，経済人類学者としてのポランニー像である．

生涯 3 度国外へ移住し，そのうち 2 度が亡命という波乱に満ちた人生を送ったポランニーは，移住に前後してその研究領域をすくなからず変化させている（表 1）．近年の研究では，おおむねその年代を四期に区分することが定着しているが（若森 2011a），ここでひとまず確認したいのは，③英／米期から④の米／カナダ期にかけての変化である．この時期にポランニーは，西欧近代において市場を中心とした社会（いわゆる市場社会）がいかに成立したかという点から，市場社会成立以前の西欧および非西欧の経済とはいかなるものかという点へと研究領域をシフトさせている．

このうちはじめにポランニーの名を知らしめた研究とは，マーシャル・

サーリンズやジョージ・ドルトンといった彼の弟子にあたる人類学者の活躍もあって，古代ギリシア，メソポタミア，ダホメなどの非市場社会をめぐる研究，時期としては晩年の研究だった（ポランニー 1998a; 1998b; 2003［chap.3, 7-10］; 2004）．それ以前のポランニーの業績，とりわけ『大転換』をはじめとした同時代欧米の市場社会をめぐる研究は，むしろ彼が経済人類学者としての一定の名声を得た後，とりわけ彼の死後に知られるようになったという経緯がある．

なぜポランニーは，近代市場社会から古代社会・非西欧社会の研究へと

表1　ポランニー略年譜

① 1886-1919年 （ハンガリー期） 弁護士・民主化運動家	1886年 1904年 1908年 1915年	ウィーンに生まれる．直後ブダペストへ移住．父はハンガリー系ユダヤ人の実業家（99年会社倒産），母はロシア貴族． ブダペスト大学に進学，法制史を専攻． 学生を中心とした社会運動組織「ガリレイ・サークル」を創設． 第一次大戦にオーストリア＝ハンガリー軍騎兵将校として従軍．
② 1919-33年 （オーストリア期） 社会主義者・ジャーナリスト	1919年 1923年 1924年	ハンガリーの革命政権の崩壊後，ウィーンへ亡命．オーストロ・マルクス主義，ギルド社会主義の研究に着手． 女性革命家イロナと結婚． ©1924-33年　社会主義経済計算論争に参画．
③ 1933-47年 （英／米期） 労働者教育協会講師・キリスト教左派	1933年 1934年 1940年 1944年	ヒトラーの独政権奪取後，ロンドンへ亡命．キリスト教左派と交流． 労働者教育協会の講師に就任．イギリス社会経済史を研究． ロックフェラー財団の支援を受け渡米（～43年） 『大転換』(初版)出版．
④ 1947-64年 （米／カナダ期） 経済史家・経済人類学者	1947年 1957年 1964年 1977年	コロンビア大学の客員教員として着任（～52年）．カナダの自宅から通う．共同研究「社会における経済の位置とその変化」を主催． 編著書『初期帝国における交易と市場』を出版 死去 遺稿集『人間の経済』出版

き関心を移したのか．しばしば見られるのが[5]，晩年のポランニーが現実の西欧世界に失望し，それゆえ理想化された古代や非西欧の研究に向かったのだという解釈である．たとえば，ポランニーと親交があった経営学者ピーター・ドラッカーは，次のように記している．

> 先史や原始経済や古代ギリシア・ローマに探りを入れれば入れるほど，カルル〔カール・ポランニー〕は，リカードやベンサムの，それからまた彼と同時代のオーストリア学派の悪霊ルトヴィッヒ・ミーゼスやフレデリック・ハイエクの，嫌悪すべき市場信仰の裏づけをますます数多く見つけるだけに終わったのである．カルルは次第に学究の世界に引き籠り，人類学の分野の研究にかまけ，その忙しさの中に埋没していった．
>
> （ドラッカー 1979: 213）

近年進展したポランニー研究からは，こうした解釈が誤りであることがあきらかにされている（McRobbie 2006）．のこされた研究ノートや各種の草稿から，最晩年のポランニーが『大転換』の続編にあたる現代西欧を対象とした研究を構想していたことが裏づけられているからである（Rotstein 1994; 若森 2011a［chap.6］）．ポランニーは，現代西欧にたいする関心を失ったわけでも，そこから逃避したわけでもない．むしろ「長年カール・ポランニーの業績にたいする知的関心は，ほとんど経済人類学に関する彼の業績にむかっていた」が，「彼自身が生涯をかけて追求したのは『大転換』」（Harvey et al. 2007: xv）だったのである．ただしここで見落とせないのは，こうして西欧市場社会にたいするポランニーのアクチュアルな関心の一貫性が強調されればされるほど，非市場社会をめぐる彼の経済人類学的関心は軽視，すくなくともかつてほどには重視されなくなっていったという点である[6]．

それだけではない．市場社会における交換と非市場社会における互酬・

再分配とを対比的にあつかう議論は，人文社会科学を席巻したポスト・コロニアリズムの脈絡のなかで批判にさらされるようになった．未開社会の専門家として自らを制度化しつつあった人類学にとり，こうした硬直的な二項対立の図式は好都合だったといった批判である[7].

ポランニーは互酬・再分配と交換をかならずしも相互排他的に捉えていたわけではなく，むしろ部分的に重なりあうものとみなしていた点からして（ポランニー 2003: 379)），この種の批判をそのまま受入れるわけにはいかない．とはいえ、それがまったく的外れな批判であったともいいがたい．具体例として，人を経済的な行為にかりたてる動機についてのポランニーの議論を参照しよう．形式的な経済学が前提とするのは，「ホモ・エコノミクス」と呼ばれる自由で自立した経済主体の存在である．この経済主体を行為にかりたてるのは，「飢えることへの恐怖と利得を得たいという希望」（ポランニー 1998a: 105）とされる．こうした形式主義的な議論にたいしてポランニーは，飢えへの恐怖と利得への希望によって経済が稼働するようになるのは自己調整的市場が確立した近代以降のことであって，それ以前の経済は，もっぱら互酬や再分配を通じて動いていたと主張する．その主張はひとまず説得的である．しかし，ではなぜ人が互酬や再分配をするのかという点については，ポランニーの経済人類学は沈黙する．「動機や評価との結びつきをできるだけとりあげないのである」（ポランニー 1998a: 89）．ゆえに，互酬・再分配をめぐる制度がいかなるものかは説明されとしても，そうした制度を生きる人びとが何に突き動かされてそう行為するのかは説明されない．いいかえるとポランニーはホモ・エコノミクス像を退けたとはいえ，これに代わる人間像を明示したわけではないのだ．あたかも近代以前の西欧と非西欧世界では，人が確たる動機を欠いたまま黙々と互酬・再分配活動を営んでいたかのようである．こうしたポランニーの議論に静態的な制度論と批判されてもやむをえない側面があったことは否定しがたい（Dale 2010: 122）.

表2 『経済と自由』の構成

	タイトル	執筆年	種別
1.	新しい西洋のために	1958年	草稿
2.	経済学とわれわれの社会的運命を形成する自由	?（1947年前後）	講演
3.	経済史と自由の問題	1949年	講演
4.	経済思想の新たな地平	?（1950年代後半）	草稿
5.	制度分析は，いかに社会科学に貢献するか	1950年	講演
6.	国際理解の本質	?（1941～47年）	草稿
7.	平和の意味	1938年	雑誌
8.	平和主義のルーツ	1935～36年	講演
9.	未来の民主的なイギリスにおける文化	?（1936年以降）	講演
10.	ウィーンとアメリカ合衆国での経験―アメリカ編	?（1940～43年）	講演
11.	社会科学をいかに用いるのか	?（1939年以降）	草稿
12.	政治理論について	?	草稿
13.	世論と政治手腕	1951年	講演
14.	一般経済史	?（1947～52年）	講義
15.	古代における市場的要素と経済計画	?（1950年代）	講義
16.	今，何が求められているのか―ひとつの応答	1919年	雑誌
17.	近代社会における哲学の衝突	1937～38年	講演
18.	混乱の暗い影と社会主義の見通し	?	草稿
19.	転換期の現代に関する五回の講義―十九世紀文明の終焉	?（1947～52年）	講義
20.	転換期の現代に関する五回の講義―統合された社会への動向	?（1947～52年）	講義

こうした問題が見いだされる従来のポランニー像にたいし，近年公刊されたテキスト群からは，いかなるポランニー像が立ち現れつつあるのか．最新の論集『経済と自由』の概要紹介を通じて見ていくこととする．

3　多様性：『経済と自由』について

『経済と自由』には全20篇の論考がおさめられている．その大半はポランニー政治経済研究所のアーカイブに保管された未発表の草稿，講演原稿である．いかなる狙いがあってこれらのテキストを選んだのかを，編者2名はかならずしも明確に説明していない．とはいえ全体としてみると，いくつか指摘できることがある．ひとつは，テキストの大半が1930年代後半から1950年代にかけて執筆されている点である．

先にも述べたようにポランニー思想は，移住に前後して少なからず変化している．表1でいうと『経済と自由』の大半を占めているのは，③の英／米期および④の米／カナダ期のテキストである．つまり，1944年に初版が公刊された『大転換』前後の著作物や講演原稿などに所収テキストが集中しているのである．

じっさい『経済と自由』所収のテキストには，『大転換』に通じる議論がくりかえし現われる．その最たるものが，市場経済の特殊近代性をめぐる議論である．一例として1937年頃の講演原稿「近代社会における哲学の衝突」（17章）を挙げることができる[8]．

> これも言うまでもないことですが，土地と労働が，市場の法則にしたがって単に商品として売買され，生産・再生産されるような社会は存在しえなかったのです．まず，土地について言えば，それは文字どおりの意味で生産されるなどということはありません．また，社会における暮らしの質は，その社会が土地をいかに利用するかということに，さまざまな点で影響されます．商品としての労働となると，人間は労働の付属物たることを迫られます．こうして，実際に労働を商品とみなすという事態は，すこぶるたちの悪い冗談となるわけです．当然ではあるが，経済理論を除いて，労働が商品とみなされたことは一度たりとてありません．経済的自由主義に対する反発は，経済的自由主義そのものと同じくらい古くからあるのです．
>
> （ポランニー 2015: 356–357［chap.17］）

ここにしめされているのは，本来商品にはなりえない土地と労働が，地代なり賃金なりの名の下で，あたかも売買可能な商品であるかのように扱われてしまうところに近代市場経済の特殊性があるという主張である．この主張は講演の数年後に公刊される『大転換』において，いわゆる「擬制商品 fictitious commodities」論として整理されることになる（cf. Block and Somers 2014: 245）．

また，そうして人間や自然が商品化されることとは，人間と自然からなる社会が市場メカニズムに従属することを意味する．では逆に，そうして市場経済に社会が従属する以前，人間の経済活動はいかに営まれていたのか．以下の引用にあるとおり，その答えとは，親族関係なり宗教的関係なりといった社会関係に「埋めこまれていた embedded」というものである．

> われわれが暮らす社会というのは，部族社会，祖先中心の社会，封建社会とは異なり，市場社会なのです．〔…〕これは新しい事態なのです．というのも，供給・需要・価格が一つのメカニズムとしてすなわち市場として制度化され，これが社会生活の従属物以上のものになるほどの事態は，決してなかったからです．反対に，経済システムの諸要素は通常，親族，宗教ないしはカリスマといった経済関係以外のものに埋め込まれていました．
>
> （ポランニー 2015: 39［chap.2］）

では，近代市場社会が成立する以前，経済は社会のなかでいかなる位置を占めていたのか．これこそが，『大転換』で萌芽的に提出され，遺稿集『人間の経済』にまとめられることになる経済人類学的問いとなる．『経済と自由』14 章には，その元となるコロンビア大学での講義録「一般経済史」が収録されている．ポランニーは述べている．

> 私たちが未開社会で遭遇する経済システムが社会関係の中に埋め込まれてい

る様からは，経済史家にとって大変興味深い論点がいくつか提起されます．〔…〕経済的制度は全体としての社会という枠内で研究されるべきです．それは単に政治史や経済史の背景であるだけでなく，社会組織の一部なのです．

（ポランニー 2015: 258［chap.14］）

このように『経済と自由』には『大転換』と同時期のテキストが多数収められている．またそこには，『人間の経済』へと結実していく経済人類学的な問題関心がたしかに認められる．逆に言うと，『経済と自由』には，ハンガリー期やオーストリア期のテキストは1点をのぞき扱われていない．ことわっておくならポランニー思想の理解にはハンガリー期やオーストリア期も重要である．たとえばオーストリア期ポランニーを代表する社会主義経済論争の議論は，近年の経済思想史研究においてその議論の独自性があらためて評価されている（松岡 1996: 210）．とはいえ論集『経済と自由』の編集方針として注目される第2の点は，所収テキストの大半が執筆されたまさにその時期のポランニーが，『大転換』的でも経済人類学的でもない，じつに多彩なテーマの研究に取り組んでいたことをあきらかにしている点である．

一例として科学論をあげる．『経済と自由』には社会科学という語が含まれる論文がふたつある．うち5章「制度分析は，いかに社会科学に貢献するか」で論じられているのは，経済の実体的意味の解明という経済人類学ではおなじみの主題であるが（cf. ポランニー 1998a），むしろ注目されるのは11章「社会科学をいかに用いるのか」である．そこに登場するのは，経済人類学ではなく，弟マイケルさながらに科学哲学を論じるポランニーである．

おもいきって論旨を要約すると，ポランニーは，科学を無分別に使用し，その結果もたらされる正負の効果を等閑視する立場を批判する．これは，いわば知の「自由主義的な」乱用だからである．こうした知の用法

からは科学の暴走が招かれ，ついにはファシズム的な科学懐疑主義が招かれかねない．ゆえに，科学にたいして人間の主権を確立する必要がある．そのためには何が必要か．かつて科学が排除した形而上学を復活させることであるとポランニーは主張する[9]．

> 人間の生は，環境世界に対する調整のプロセスであり，この環境は科学が形而上学的であるとして排除してきた知の母胎の要素から構成される．〔…〕だからこそ形而上学は尊厳を持つと言える．そこには，芸術，宗教，道徳，私的（パーソナル）＝人格的，生活，科学といった諸々の知の母胎である人間の共通意識は包括的性格を持つという主張が組み込まれているためである．
>
> （ポランニー 2015: 203［chap.11］）

もうひとつ参照に値するのは，6〜8 章の戦争論である．

> 戦争は（結婚と同様），人間社会の基底にあるさまざまな事柄〔…〕によって引き起こされる問題を解決できる制度です．〔…〕戦争は制度であるということが，なぜ，核心部分の機能を同じように担う他の制度で代替することがなければ戦争を無くすことができないのかを，十分に説明します．
>
> （ポランニー 2015: 120–121［chap.6］）

この引用に示されるとおり，ポランニーによると戦争は制度の一種である．しかも結婚と同程度に普遍的といえる制度である．そうとらえることでポランニーは，すべての戦争は防げると説く理想主義が，結婚という制度が不在でもセックスは統御されるという「自由恋愛主義（フリーラブ）」の発想と同じく，非現実的だと指摘する．ならばポランニーは戦争を正当化するのか．否である．戦争が相容れない集団的利害を解決する制度であるとみなすポランニーにとり，重要なのは，戦争に代わって集団的利害を調停する制度

を確立することなのである．彼は，現にそうした制度が1815年から1914年までのあいだイギリスを中心とした国際秩序――「平和の100年」――として実現していたと考えていた（cf. ポランニー 2009: 3–32）．その秩序が崩壊した大戦後の世界において戦争に代わる制度をいかに再構築するか．それがポランニーにとっての最大の関心事だったのである．

ほかにも『経済と自由』には，これまでほとんど知られてこなかった多彩なポランニーのテキストが収められている．たとえば，9章ではイギリスの文化・文明論が，10章ではアメリカを対象とした比較教育学的論考が，13章には世論の政治学的分析が，といった具合である．『大転換』や『人間の経済』には見られない，こうした複数的なポランニー像に注目する優れた研究者はすでに現れていたが（Cangiani et Maucouorant 2002; Dale 2010; 若森 2011a），ポランニー自身の言葉を通じてその実像に迫ることを可能にした『経済と自由』の功績はひときわ大きい．ポランニーの問題意識は，近代西欧をめぐる『大転換』的関心と非西欧・古代西欧をめぐる経済人類学的関心とに二分できるほど狭隘でも単純でもなく，より広範かつ複合的だったと捉える方が適切である．

以下で論じたいのはしかし，複数性とは正反対の方向である．時代と分野を超えて一貫するポランニーの関心事，すなわち，自由についてである．以下では論集『経済と自由』ばかりでなく，『大転換』をはじめとした他の著作にまで射程を広げて検討していく．

4　一貫性：自由について

4-1　経済的自由と社会的自由

ポランニーは，一般に自由主義の批判者として知られる．ここでいう自由主義とは，経済をめぐる政府の役割を最小限にし，市場の自己調整機能にまかせるべきという主張，いわゆる経済的自由主義のことである．経済学者ジョセフ・E・スティグリッツに代表されるように[10]，ポランニーが

近年再評価を受けているのは，こうした経済的自由主義の行き詰まりを彼が的確に説明していたと評価されているからである．

ところが，それと同時に近年あらためて注目されるようになったのは，自由の批判者というより，自由の積極的な擁護者としてのポランニーの姿である．「彼の仕事のなかで実に驚くべき統一を形成している究極的な対局性は，人間の自由と社会の現実をめぐるものにほかならない」（ポランニー＝レヴィット・メンデレ 1986: 6）．いいかえれば，「ポランニーの人生の大半は，自由というテーマにしめられていた」（Randles and Ramlogan 2007: 264）のである．

これは矛盾ではない．ポランニーが問題とする自由には，ふたつの意味があるからである．ひとつは，自由主義経済学者がいう，経済は市場に委ねるべきだという意味での自由である．もうひとつは良心・言論・信教・結社の自由，いいかえるなら政治的・宗教的・道徳的な自由，近年のポランニー研究をリードしてきた若森の表現をかりるなら「社会的自由」（若森 2015: 241）である[11]．『経済と自由』におさめられた講演原稿「経済史と自由の問題」（3 章）には，そのことが端的に示されている．

> 実に皮肉なことですが，今回の経済決定論〔第二次大戦後にあらためて主張されるようになった自由放任主義的な経済決定論〕は反マルクス主義の主導者を自認する人びとによって唱えられています．原理的には市場経済と同義である十九世紀的形態の市場システムを擁護しないのであれば，私たちは必然的に自由を喪失することになると彼らは警告しています．
>
> しかし，彼らの新たな金言には，過去のものよりも多くの真実が含まれているでしょうか？確かに，良心・言論・信教・結社の自由などが正当に評価され，市場システムの拡大と並行して制度化されました．〔…〕現在の決定論の基本的な主張は，〔…〕これらの自由が再び姿を消すことは必然であり避けがたいというものです．このような見解は，高潔な善意の人びとによって力

説されています．ハイエク教授もその一人です．

（ポランニー 2015: 58［chap.3］）

以上の引用にしめされるとおり，ポランニーによると，ハイエクを初めとした自由主義者は，経済的自由が損なわれれば必然的に社会的自由も失われると主張する．彼らの前提にあるのは，経済的自由に社会的自由が従属するという発想である．ポランニーの主張は逆である．彼が重視するのは社会的自由であり，これに経済的自由は従うべきとされる．いうなれば，経済的自由は社会的自由に「埋めこまれ」なければならないのである．

とはいえ経済的自由を社会的自由に埋めこむということは，経済的自由に社会的な制約を設けることを意味する．この種の制約を誰がいかにもうけるのか．それは権力によって強制されるほかはないというのが，ポランニーの見解である．こうしたポランニーの自由観をよく示しているのが，『大転換』終章「複合社会における自由」（ポランニー 2009［chap.21］）である．それによると，経済的自由主義に支えられた19世紀文明は，最終的には二度の大戦へと帰結した．その過程で経済的自由主義への防衛反応として生まれたのが，ファシズムと社会主義だった．とはいえ，両者には決定的な違いがあった．ポランニーは述べる．

ファシズムと社会主義の違いは，本来，経済的なものではない．それは，道徳的・宗教的な違いである．〔…〕両者を分けるのは究極的に自由の問題である．ファシストも社会主義者も同様に，死についての認識が人間の意識を形成したときの究極性をもって社会の現実を受け入れる．権力と強制は，その現実の一部である．社会からそれらを締め出そうとするような理想は，正当な根拠をもたない．両者の立場が分かれるのは，この認識に照らして自由の観念を支持しうるかどうかという点である．自由とは空虚な言葉であり，また人間とその事業を崩壊させるために仕掛けられた一種の誘惑であろうか，それとも人間は，

> その認識に照らして自己の自由を再び擁護し，道徳的な幻想に流れることなく社会におけるその実現に向けて努力することができるだろうか．
>
> （ポランニー 2009: 466）

自由を完全に放棄するか，それともある制約内で自由を追求するか．ふたつの道のうち，ポランニーが可能性を見いだしていたのは後者の道である．

娘カリによるなら，ポランニーはハンガリーで育ちカナダで死を迎えるまで一貫して社会主義者だった[12]．ただし彼とマルクス主義との関係は微妙なものであり，とりわけ現実に成立した社会主義国の中央集権的・全体主義的傾向にポランニーは批判的だった（ポランニー 2012: 288; 2015: 325–327）．彼が志向したのは，地方自治体と協同組合の水平的連合からなる分権的な社会主義であった．『経済と自由』所収の 1919 年の論文「今，何が求められているのか—ひとつの応答」（16 章）では，ポランニーがみずからの立場を「自由社会主義」と位置づけていたことがあきらかにされている．同論によると，「自由こそあらゆる真の調和の基礎 die *Grundlage aller wahren Harmonie*」（ポランニー 2015: 317）なのである．

経済思想史研究者の中山によると，自由という問題をめぐるポランニーの関心は，彼のみならず同時代のウィーンを生きたミーゼスやハイエク等のオーストリア系の経済思想家に広く共有されたものだった（中山 1998: 133）[13]．ただしポランニーが追求した自由は，ミーゼスやハイエクといった自己調整的市場の信奉者が語る自由とは異なるものだった．権力による強制を現実として受け止めつつ，それでも自由という理念を放棄せず，それを追求すること．これがファシズムが敗退した第二次大戦後にポランニーが到達した自由をめぐるひとつの結論だった（cf. 若森 2011: 165–174）．

4-2　道徳と自由

ところで先に見た『大転換』の引用を見ると，ポランニーは，ファシズムと社会主義の違いが「道徳的・宗教的な違い」であると述べていることに気づく．つまり，ポランニーが追求した自由とは，政治経済システムという制度の問題ばかりでなく，道徳的・宗教的な理念の問題でもある．

こうしたポランニーの主張にたいしては，ポランニー研究者からも疑問が提出されている．たとえば中山（1998: 155）は，経済的自由に対抗するかたちで打ち出された道徳的・宗教的な理念としての自由とは，はたして前者の有効な代替案たりえているのか，むしろそこにポランニーの限界があったのではないかと指摘している．また別の研究者からは次のような批判が出ている（佐藤 2006: 183–184）．ポランニーのいう自由は結局のところ実現困難である．なぜならポランニーは，個人の道徳的責任を過剰に問うからである．しかもそうした姿勢には，ロンドン時代にキリスト教左派の影響を受けた彼固有の価値観が色濃く反映しており，非キリスト教的文化圏に住む者には理解しがたい．

たしかに，キリスト教的な自由の否定がファシズムであり，キリスト教的な自由の発展形が社会主義だと主張するときのポランニーは特定の規範に過度に埋没している節がある（ポランニー 2003［chap.6］）．とはいえ，こうした点に気を取られるあまり，ポランニーがキリスト教的な表現によって論じようとしていた問題自体を見落とすべきではない．いったいこの経済思想家は何を語ろうとしていたのか．そこで注目されるのが，『大転換』ではキリスト教的表現によって論じられている自由の問題を，マルクス主義的表現で論じた論考，1927年に執筆されながら，2000年代まで日の目を見ることがなかった「自由について」というテキストである（ポランニー 2012: 21–69）．

このなかでポランニーは，カール・マルクスの疎外論を手がかりに自由の意義を論じている．彼によると，資本主義社会において人は根源的な不

自由にとらわれている．すなわち，人が生み出したはずの経済システムに人が支配され，しかもその支配の現実に気づかないという不自由である．自己の利益を自由に追求すればするほど，自己疎外のシステムは強化される．こうして人は総体として不自由になっていく．労働者ばかりか資本家もそうである．これを乗り越えるためには，自己のために自由を追求するのではなく，他の誰かのために義務と責任を負う必要がある．かくしてポランニーは自らのいう自由を以下のように表現する．

> 自由であるというのは，したがってここではもはや典型的な市民のイデオロギーにおけるように義務や責任から自由だということではなく，義務と責任を担うことによって自由だということである．それは選択を免れた者の自由ではなく，選択する者の自由であり，免責の自由ではなく，自己負担の自由であり，したがってそもそも社会からの解放の形態ではなく，社会的に結びついていることの基本形態であり，他者との連帯が停止する地点ではなく，社会的存在の逃れられない責任をわが身に引き受ける地点なのである．
>
> （ポランニー 2012: 34）

このポランニーの自由論を理解する上で重要なのは，引用文中の義務と責任が「汝の隣人を愛せ」といった道徳的・宗教的規範ではなく，社会変革に向けた目標，すなわち経済的自由が人に課す自己疎外の乗り越えという目標に基づいているという点である．いいかえるとポランニーは，自らの自由を制限してでも他人に尽くせ，などと自己犠牲を説いているわけではない．その主張の要点とは，他者のために義務と責任を負うことがほかならぬ自己の自由につながるという点である．

こうしたポランニーの主張の根底にあるのは，社会的存在としての人が生まれつき自分以外の誰かに何かを負っているという認識である．この負債を返済すべく，人は他者にたいする義務と責任を引き受けなければなら

ない．ポランニー自身の言葉をひくなら，そのとき人ははじめて，「自分が生きるなかで他人に負担させたすべてのものに支払いを済ませた人のように，本当に自由」（ポランニー 2012: 39）になる．これぞポランニーが追求した，経済的ではない意味での自由，社会的自由だったのである．

こうした視点を確保した上で，あらためて見直してみると，一見キリスト教的規範を過度に内面化しているかのようなポランニーの議論にも，彼独自の，しかし非キリスト教徒にも通じる問題意識が組み込まれていたことが分かる．とくに，参照したいのが自由と道徳の関係である．

> 自由主義的資本主義の自立的個人は，単に自分の依存関係に気づいていないがゆえに，自立的である．しかし，彼がそれに気づいていないのは，ただ道徳的感受性が欠落しているためである．道徳的感受性が欠落しているために，彼は自分の個人的行為や怠慢の社会的影響を無視することができるのである．本当に自立したいと望む人は，真に本当に自立的であることが可能である社会を築くために，まず依存関係の重荷を引き受けなければならない．〔…〕自立は，われわれの負債を支払って社会的束縛からわれわれ自身を解放することによってのみ達成しうるのである．
>
> （ポランニー 2012: 134）

ここにあげたのは，ロンドン時代のポランニーがキリスト教左派グループの会合でおこなった講演「共同体と社会」からの抜粋である．ここでポランニーは，「自立 independent」は「われわれの負債を支払って社会的束縛から我々自身を解放することによってのみ達成しうる」と述べている．この場合の「自立」は，先に見た引用における「自由」に近い．それは社会的束縛から人を「解放＝自由化する liberating」ことによって実現される状態だからである．そして，この意味での解放＝自由化は「依存関係の重荷を引き受け」ること，いいかえれば「われわれの負債を支払」う

ことによって達成されるとポランニーはいう．ここからは，ポランニーの自由論とは負債論の変奏であることが見てとれる．さらに興味深いのは，ここでポランニーが自由主義的資本主義における個人も，ある意味，確かに自立的だと述べている点である．ただしそれは自分の依存関係に気づいていないという意味での自立にすぎない．そうした自立を仮構するのが，「道徳的感受性」の欠落だという指摘は示唆的である．だとするならポランニーにとって，自由は追求されるべき道徳だというのではなく，そもそも自由は道徳なしには成り立たないということになる．いわば道徳こそが自由の前提であり条件なのだ．

最後に，これまで見てきた議論から，経済人類学的とされるポランニーの研究を捉えなおしてみるとき，どのような可能性が浮かび上がってくるかという点について検討する．結論を先取りするなら，ひとつのテーマが特権的ともいえる重要性をもつ．すなわち，負債である．

5　可能性：負債について

5-1　負債論とポランニー思想

負債，あるいは債務という問題は，近年の人文社会科学研究で流行をみせているテーマである（グレーバー 2016; ラッツアラート 2012; サルトゥー＝ラジェ 2014a）．その背景にあるのは，2008 年のサブプライムローン問題とリーマンショックにはじまり，ギリシャをはじめとする欧州の債務危機へと波及した一連の金融不安である．こうした状況は，たんに個別の債務問題についての研究のみならず，そもそも人間にとって債務，負債とは何であるのかという問いを引き起こしてきた．こうした根源的な問いをめぐる議論のなかで，くりかえし参照されてきたテキストがふたつある．ひとつがマルセル・モースの「贈与論」（Mauss 1924）である．同論は，貨幣を通じた商品交換ではなく贈与交換こそが負債を発生させるといった脈絡で参照される．いまひとつはフリードリヒ・ニーチェの『道徳の系譜』

（ニーチェ 1940）である．同書によると道徳，とりわけキリスト教的な道徳は，ほかならぬ負債から生まれたとされる．

さて，ポランニーは，贈与や互酬性をめぐる経済人類学的議論においてモースとならんでよく言及される人物である．ところが近年の負債論の脈絡でその名があがることはほとんどない[14]．ポランニーは負債というテーマを正面から論じているわけではないからである．すくなくとも，互酬・再分配・交換をめぐる論考のように抽象度の高い理論研究をおこなっているわけでも古代ギリシア，メソポタミア，ダホメの経済的諸制度をめぐる論考のような事例研究を行っているわけでもないことは確かである[15]．

比較的まとまった論考が見いだしうるとすれば，それは「原始貨幣に関するノート」（ポランニー 1998b）をおいてほかにはない．もっともこれは，1947～50年にポランニーがコロンビア大学で経済史の講義をおこなった際に配布したメモであり，「貨幣使用の意味論」（ポランニー 2003［chap.3］）――これは現在の貨幣には起源のまったく異なる複数の用法が含まれていることをあきらかにした晩年のポランニーを代表する論文である――が彼の死後に公刊された論集に再録された際（Polanyi 1968），補論として収録されたものである．しかしこの断片的な貨幣論にこそ，オーストリア期のマルクス研究から英／米期のキリスト教左派の研究を経て晩年（米／カナダ期）経済人類学にいたるポランニーの負債をめぐる関心がよくあらわれている．

だがこうした論の運びには違和感をもつ者もいるかもしれない．本稿は前節において自由論との関連からポランニーにとっての負債という問題に言及した．そこで論じたのは，人が他者に負うことなくしては生きていくことができないという，思想的・道徳的な意味での負債だった．しかしながら，貨幣論に収められた負債論と，自由との関連で論じた負債論とでは位相が異なる．貨幣論でいう負債とは，お金をめぐる負債，いわゆる借金のことではないか．リーマンショックにせよ欧州債務危機にせよ，むしろ

通常負債といえばこうした経済的意味での負債をさす．一方，さきほど参照した思想的・道徳的意味での負債とは，経済的負債の比喩にすぎないのではないか．そうした違和感であり，疑問である．

5-2　非経済的なものをめぐる負債

しかし，ポランニーの経済思想においては道徳的な自由をめぐる負債論と，経済的な貨幣をめぐる負債論とを分けて考えることができない．なぜなら，ポランニーが貨幣論の枠組みで論じる負債とは，「経済的な取引と関係なく」（ポランニー 1998b: 567）作動しうるものだからである．そうした場合，「どのようにして債務や責務 debts and obligations は生ずるのか」．この問いの答えとしてポランニーは，身分，親族関係，呪術，宗教，（名誉などに由来する）特権の侵害，政治権力という 6 つの要因をあげる．ポランニーは述べる．

> これらすべての要因は，原始社会に働きかけて，非経済的性質の負債をつくりだす一因となる．責務は身分，血縁，血讐，権威，親族関係，そして婚約ないし婚姻に基礎をおき，借金の支払，約束の履行，つまり債務の解消を含む．これらすべてを行なう手順は，呪術，祭式的な法，聖的儀式のサンクションによって行なわれる．債務は経済的取引の結果としてではなく，婚姻，殺人，成人，ポトラッチへの挑戦，秘密団体への参加などの結果として課される．原始社会においては，経済的利害やそれに対応する責務は厳格さを欠き，寛大さや弾力性をもつ傾向があると同時に，ふつう，平等な扱いや経済的利己主義は，動機としては是認されえない．逆に，非経済的な根拠による債務や責務に関しては厳格さをもつ．
>
> （ポランニー 1998b: 568）

ここでとくに注目したいのは，以上の引用に記されているさまざまな社

会関係の大半は，狭義の貨幣を媒介とした関係ではないという点である．記されているのはむしろ，ある個人や集団が別の個人や集団に何かを負い，ゆえに返礼（返済）する義務を負うという社会関係そのものである．こうした社会関係が，支払い手段，貯蔵手段，交換手段，価値の計量手段などと統合されることではじめて完成するのが，近代的貨幣である（ポランニー 2003［chap.3］）．つまりポランニーによれば，負債は貨幣に先行して生じた現象だということになる．

そればかりではない．ポランニーは『人間の経済』のなかで「債権・債務関係は市場の存在に先行する原始的な現象」（ポランニー 1998a: 27）であると述べている．ポランニーにとり，負債が貨幣や市場といった制度に先行する，人間にとって根源的な現象であったことは間違いない[16]．

こうしたポランニーの議論がもつ意義は，たとえば現代負債論のひとつの源泉であるニーチェの議論と比較してみるとき，よりあきらかになる（ニーチェ 1940）．さきにふれたように『道徳の系譜』のなかでニーチェは，キリスト教的な道徳や宗教の起源に負債という問題があることを指摘した．ところでここでいう負債とは，あくまで経済的，物質的な負債である．道徳や宗教という神聖なものの根幹に，負債という経済的かつ世俗的な動機が潜んでいるという逆説をあきらかにすることが彼の狙いだった．ただしこうしたニーチェの立論は，彼がどんな「低度な文明」にもあるという負債にもとづく関係を，「値を附ける，価値を量る，等価物を案出し，交換する」関係と同一視することの上に成り立っている（ニーチェ 1940: 79）．しかしこれらは，支払い手段，貯蔵手段，交換手段，価値の計量手段を統合した全目的的な貨幣が流通することではじめて可能となる関係性である．実のところこの種の貨幣は，近代西欧になってはじめて成立したにすぎない．このことをあきらかにした希有な経済思想家こそがポランニーだったはずである．道徳の根源に負債を見出すニーチェの発想に異論はないが，その負債を経済的な意味にとどめてしまうところに限

界がある．負債が経済的なものだとしても，それは社会に埋めこまれた経済にほかならない．このことをポランニーの負債論はあきらかにしているのである．

さらに大胆な仮説を提示するなら，ポランニーの非経済的な負債をめぐる思考は冒頭で掲げた問題へと連絡している可能性がある．すなわち，何によって人は互酬や再分配にかりたてられるのかという問題である．その答えは，負債にたいする道徳的感受性ということになるのではないだろうか．この負債感こそが，社会に埋めこまれた経済のなかで人を行為へと突き動かす誘因，市場経済における飢えの恐怖と利得の希望に相当する動機となりうるからである．しかもポランニーの論じる負債とは，単に借り手を貸し手に隷属させる制度ではなく，返済を通じて人を解放＝自由化する契機でもあった．だとすればポランニーが晩年の経済人類学的研究を通じて非西欧世界に探りあてようとしていたのは，単なる互酬・再分配制度の諸事例というより社会的自由の具体的で多様なあり方，彼が生涯追求しつづけた経済に還元されない自由の可能性そのものだったとも考えられる．

そう考えてみたとき，「原始貨幣に関するノート」のなかでポランニーが非西欧社会の身分関係から生じる負債をめぐって述べている，本稿の冒頭にかかげた次の何気ない一言は，世界がもれなく市場化したかのようにも見える現代のあらゆる人びとにあてはまる言葉であった可能性が浮かびあがってくる．「人びとは債務を支払うべく生まれつき，また責務を履行すべく生まれついている」．

人はホモ・エコノミクスなどという生まれつき自由で自立した経済主体ではない．つねにすでに何かを他者に負う構成体である．ただし人はまた，道徳的な感受性を備えるがゆえに，ただ一方的に他者に負いつづけることができない．いいかえれば，負債は返されねばならないというモラルが人には埋めこまれている．ポランニーが一貫して追求した非経済的な意味での自由，つまり社会的自由とは，生まれつき他者に負うからこそ負債

を返すことによって自由にもなりえる存在としての人，いわば「ホモ・デビトゥム homo debitum」とでも呼ぶべき人間像の上に成り立つ地平だったのではないだろうか.

6　おわりに

本稿で見てきたとおり，近年のポランニー研究からは多彩なポランニー思想の内実があきらかにされる一方で，その根底に一貫して自由をめぐる関心があったという点が示されできた．本稿ではさらに，ポランニーのこうした自由論には「他者に負う潜在的な不自由とその負債からの自由」という独特な問題構成が織り込まれており，しかもこの自由論の変奏としての負債論は，正面から理論的・実証的な研究の主題として選び取られたわけではないものの，貨幣論などのかたちでポランニーの経済人類学研究の端々で展開されていたことを指摘した．その議論は近年の負債論に照らしても先駆的な意義があるといえる[17]．現代人類学において重要な意味をもつポランニー思想とは，もはや互酬・再分配をめぐる議論というより負債をめぐる議論なのかもしれない.

一例として著者のフィールドを事例としてとりあげたい（佐久間 2013）．ここで負債論として検討する余地があったのは土地である．ふつう土地は所有の対象となるものであるが，著者が調査したニジェール西部農村社会では，つきつめていうと土地は排他的な所有物というより，他者からの贈与物とみなされていた．ここでいう贈与とは，近年おこなわれた単なる貸借であるばあいも，数世代前におこなわれた文字通りの贈与を意味する場合もある言葉であるが，いずれにせよ重要なのは，土地は所有物でもましてや商品でもなく贈与物として想像されているがゆえに，その土地で生活を営む者は，それを贈与してくれた者に負債を負うという点である．そうした負債は，どのように返済されるかといえば，それは労働を通じて返済される．ただし，どの程度働かなければいけないという明確な

規則があるわけではない．それどころか，この社会においては，土地を与えられたものは，自由かつ自発的に与え手のものとへ働きに行く[18]．そこには，他者に負う潜在的な不自由とその負債からの自由というポランニー的自由論のモチーフが端的にあらわれているようにも思われる[19]．

そのうえこの負債にたいする返済は，終わることがない．与えられた土地で農業を営みつづける限り，返済はつづく．数世代前に土地を贈与されたことに由来する負債がいまなお人びとを自発的な労働へと促しているのである．つまり負債は完済されない．だからこそこの関係は，土地の与え手と表象される首長の権威を正当化し，逆に彼から土地を与えられたとされる異民族や奴隷の社会的劣位をも正当化していた[20]．

その一方で，こうした社会に埋めこまれた負債の問題を，現代世界を取り巻く経済的な意味での負債という問題と接続してみる必要があるのかもしれない．いわゆる対外累積債務という問題である．そのときポランニー思想は新たな輝きを帯びてくるであろうし，その際あらためて問われるのは，ポランニーの社会的自由論，他者に負う潜在的な不自由とその負債からの自由をめぐるモラルについてとなるのではないか．

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15H05385, JP17H00948, JP17H02328, JP17K18480 の助成を受けたものです．

注

[1] 厳密なポランニーの出生地はオーストリアのウィーンであるが，直後にハンガリーのブダペストに移住していることをふまえ，「ハンガリー出身」とした．また“Polanyi”という名前の日本語表記をめぐっては，「ポラニー」や「ポラーニ」なども採用されているが，本稿では『人間の経済』に記された訳者玉野井の見解に基づき（玉野井 1998: 10），参照文献の表記も含めて「ポランニー」で統一した．

[2]「互酬 reciprocity」・「再分配 redistribution」・「交換 exchange」は，ポラン

ニーが定式化した経済を制度化する三つの形態であり，それぞれは次のように定義される.「互酬とは対称的な集団間の相対する点のあいだの移動をさす. 再分配は，中央に向かい，そしてまたそこから出る占有の移動を表す．交換は，ここでは，市場システムのもとでの「手」のあいだに発生する可逆的な移動のことをいう．そこで，互酬は対称的に配置された集団構成が背後にあることを前提とする．再分配は何らかの程度の中心性が集団のなかに存在することに依存する．交換が統合を生み出すためには，価格決定市場というシステムを必要とする」(ポランニー 2003: 374).

[3] なおポランニーは，モラルエコノミー論においても,「独創的で大きな影響力を持つ」(Arnold 2001：86）研究者としてエドワード・P・トムソンと並び称されてきた人物である.

[4]『経済と自由』の原著は，まず2014年にイタリア語で，2015年に英語で公刊されており，タイトルは，同書所収の論文名である『新しい西洋のために Per un Nuovo Occidente/For a New West』である.

[5] こうした見解をとる研究者としてはほかにも,「ポランニーの人類学的資料にたいする関心はもちろん彼のユートピア的展望の不可欠の部分だった」と主張する Humphreys（1969）や，晩年のポランニーが「自らの社会主義を実現する方途を見失い,「歴史上のユートピア」の探索に向かわざるをえなくなったのではないか」と推測する佐藤（2006）などがいる．また古代エジプトやバビロニアに市場経済は不在だったとするポランニーの史料解釈もまた，専門家である Komoróczy（1990）によって「ユートピア」的と批判されている. これらの批判の妥当性は,「自己調整的な市場システムを打ち立てようとした経済的自由主義」こそが「ユートピア的」だったとするポランニーの主張と照らして慎重に見積る必要がある（ポランニー 2009: 49）．すくなくとも，ポランニー読解の骨子が経済人類学から経済史・経済思想史へ移行する端緒となった著書のなかでスタンフィールドが述べているところによれば，ポランニーの経済人類学的研究は,「ユートピア的であるどころかリアリズムの極みにあった」(Stanfield 1986: 17).

[6] 例えばポランニーの娘カリ・ポランニー＝レヴィットによると,「〔ポランニーが〕経済人類学へと長い回り道を辿ったのは,『大転換』の主要テーゼを検証するためだった」(Polanyi-Levit 2006: 10)．そのテーゼとは，経済は本来社会関係のなかに埋めこまれており，人間が経済の付属物と化したのは特殊西欧近代的な出来事だというものである．つまりポランニーの関心は西欧近代に向けられていたのであり，非西欧や近代以前の西欧社会にたいする関心はあくまで付随的なものにすぎなかったとされる．同様の見解は佐藤（2006）に

も記されており，晩年のポランニーによる経済人類学的研究は「実りの多い迂回」ではあったものの，「迂回は迂回にすぎず，ポランニー自身の究極的目的はあくまで現代世界の分析」にあったことが強調されている（佐藤 2006: 22）.

[7] 一例として次を参照.「彼が現代資本主義と他の社会の間に引いた鋭い二項対立の区分は，人類学者の間に深く根付く必要と結びついた．すなわち，他文化の「他者性」を打ち立てる必要，それゆえ知的分業の枠内における分離し独立した学問分野としての一画があることを正当化する必要である〔…〕」（Dale 2010: 134）.

[8] ここで取り上げたのは，1937 年から 1938 年にかけて，ロンドン大学付属エルサム文学研究所で行われた連続講演の草稿「近代社会における哲学の衝突」である.

[9] こうした科学観はハンガリー時代のポランニーが，科学から形而上学を排除した当の思想家であるエルンスト・マッハに傾倒していた点をふまえると興味深い（ポランニー n.d.［1909］）.

[10]「ポラニー〔原文ママ〕は，自由市場についての神話を暴露している．すなわち，真に自由で自己調整的な市場システムなどというものはけっして存在しなかったのだ」（スティグリッツ 2009: XV）.

[11]「社会的自由」は，ポランニー自身が未公開の論考「自由について」で以下のように用いている概念である.「経済的公正を求める闘争は，人間が自分の意志の効果を支配していないような社会状態に対する闘争に，つまり，人間の社会的自由という新しい自由のために社会的必然性全体の克服を求める闘争に通じている．／社会的自由というこの理念は，社会主義に特有なものである．社会的存在が純粋に人間的に制約されていることの社会学的認識も，この認識を歴史的に実現しようとする動機も，プロレタリアの生活に由来する」（ポランニー 2012: 29）．ポランニー自身が社会主義の脈絡において創案した「社会的自由」の概念を，若森はより広い脈絡において再考し，精緻化している（若森 2015: 241–247）

[12]「彼は，社会の現実の範囲内で自由を確保しうる諸制度を求めて，一人の社会科学者になった．彼はその受動性を脱ぎ捨て，積極的にものごとに関与する社会主義者になったのである」（ポランニー＝レヴィット・メンデレ 1986a: 20）.

[13]「同時代にウィーンに生きたオーストリア学派の経済学者達にとって，社会主義を採用すべきかどうかの問題は，経済体制，価格決定体制の問題であると共に，いやおそらくそれ以上に，自由を賭けた問題であった．彼らと同様に

ポランニーもまた自由を賭けた問題としてファシズムをとらえた．ファシズムは何よりもまず人間の自由の危機であり，自由とは人間の意識の中に存在するものであった．ファシズムを考察するためには，制度と人間の意識との関係を二つのレヴェルで，すなわち経済・政治システムという制度のレベル〔原文ママ〕と道徳・宗教というイデオロギーのレヴェルで考えることが必要であった」（中山 1998: 133）．

[14] もっとも生産的なポランニー研究者のひとりである若森が，贈与を負債という観点から読み直すことを主題にかかげた論文「贈与―私たちはなぜ贈り合うのか」（若森 2011b）においてポランニーに言及していない点はひとつの傍証といえる．また，負債論的ポランニー読解の数少ない例外として Graeber（2009）があるが，そこで主題化されているのは著者なりの負債論によってポランニーの自己調整的市場をめぐる議論を再考する作業であり，ポランニー自身が負債をいかに論じたかという点は等閑視されている．

[15] ポランニー思想における負債の問題の重要性を指摘した数少ない研究によると（Maucourant et al. 1998: xxxvi），ポランニーにとって負債という問題は，互酬性とならぶ重要性をもっていた．ポランニーは互酬や再分配にならぶほど負債に関して理論的・実証的研究をしているわけではないので，この主張をそのまま受入れるわけにはいかない．ただ後述するとおり，互酬や再分配，そしてある種の交換をめぐる彼の議論の背後に，負債をめぐる独自の思考が働いていたのではないかと推測することはたしかに可能である．

[16] ポランニーの経済人類学的な研究によると（ポランニー 1998a: 151–260），近代市場社会では三位一体的に制度化されている貨幣・市場・交易は，そもそも別個の起源をもつ非経済的な制度であった．一方ここでみたとおりポランニーは，負債が貨幣にも市場にも先行する現象であると考えていた．のこる交易と負債の先行関係をめぐっては，これまでのところはっきりとした記述は見いだせていない．

[17] ポランニーの議論は，たとえば近年の負債論の以下のような主張を先取りしていたといえる．「「債務」を表わすフランス語の dette（デット）という言葉には，主に経済的な文脈で使われる「負債」という意味のほかに，「恩」や「負い目」といった意味がある．〔…〕「債務危機」は，経済的な《負債》にのみあてはまるわけではない．この危機は，広い意味での「《借り》の危機」として，「個人」や「社会」に根本的な問題を突きつけ，現代社会が理想とする「自由」をさえ脅かそうとしているのだ」（サルトゥー＝ラジュ 2014b: 4）．

[18] たとえば次の現地農民の語りを参照．「彼はあなたが働く畑を，貢納としてではなく，あなたに与えたわけだから，それは彼があなたに恩恵をなしたとい

うことなのだから，神が雨季になさってくれたら，あなたは自分から，彼のもとに働きにいくだろう」（Olivier de Sardan 1982: 203）.

[19] あるいは，『贈与論』の著者がいう「贈与と義務と自由の入り混じった雰囲気」（Mauss 1924: 160）が表出していたともいえる.

[20] 筆者はこうした土地制度のあり方をニジェール西部ソンガイ系社会に固有と考えていた．だが本稿で試みたポランニー思想の読解に基づき，単なる土地制度ではなく非経済的な負債の問題として捉えなおしてみた場合，これは一地域の脈絡を超えた意義をもつ事象ではないかという展望が拓けてくる．この点からしてデヴィッド・グレーバーの次の指摘は示唆的である．「ほとんどのアフリカ社会では，人びとは負債を帳消しにしないように気を配っています．もし帳消しにしてしまうと，人びとはそれ以上関係をつづける理由をなくしてしまうからです．正確に借りた額を返済するということは，可能性としてその関係は終わったということを意味します．だから多くのアフリカ社会において，人びとが大切にするのは，十分に返さないか，多く返すことなのです」（グレーバー 2009: 112）.

参照文献

笠井高人 2012『カール・ポランニーの社会経済思想と「複合社会」像』同志社大学大学院博士論文.

グレーバー，D.　2009『資本主義後の世界のために―新しいアナーキズムの視座』（高祖岩三郎訳・構成）以文社.

――― 2016『負債論―貨幣と暴力の 5000 年』（酒井隆史監訳・高祖岩三郎・佐々木夏子訳）以文社.

栗本慎一郎 1979『経済人類学』東洋経済新報社.

佐久間寛 2013『ガーロコイレ―ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』平凡社.

佐藤光 2006『カール・ポランニーの社会哲学』ミネルヴァ書房.

サルトゥー＝ラジェ，N.　2014a『借りの哲学』（高野豊監訳・小林重裕訳）太田出版.

――― 2014b「借りとは何か―日本の読者への手引きとして」（小林重裕訳）『atプラス』20: 4–8.

スティグリッツ，J.　2009「序文」K. ポラニー〔ポラニー〕『［新訳］大転換―市場社会の形成と崩壊』（野口建彦・楠原学訳）東洋経済新報社.

ドラッカー，P.　F.　1979『傍観者の時代―わが 20 世紀の光と影』（風間禎三郎訳）

ダイヤモンド社.
玉野井芳郎 1998「『人間の経済』日本版の編集にあたって」K. ポランニー『人間の経済Ⅰ―市場社会の虚構性』（玉野井芳郎・栗本慎一郎訳）岩波書店，pp. 5–11.
中山智香子 1998「ファシズム思想における「合理性」―ポランニーのファシズム分析をめぐって」『文学部論叢』61: 125–161.
――― 2015「ポランニー研究の新たな地平」『ちくま』533: 14–15.
ニーチェ，F. 1940『道徳の系譜』（木場深定訳）岩波書店.
ポランニー，K.　1998a『人間の経済Ⅰ―市場社会の虚構性』（玉野井芳郎・栗本慎一郎訳）岩波書店.
―――　1998b『人間の経済Ⅱ―交易・貨幣および市場の出現』（玉野井芳郎・中野忠訳）岩波書店.
―――　2003『経済の文明史』（玉野井芳郎・平野健一郎編訳，石井溥・木畑洋一・長尾史郎・吉沢英成訳）筑摩書房.
――― 2004『経済と文明―ダホメの経済人類学的分析』（栗本慎一郎・端信行訳）筑摩書房.
―――　2009『［新訳］大転換―市場社会の形成と崩壊』（野口建彦・楠原学訳）東洋経済新報社.
――― 2012『市場社会と人間の自由―社会哲学論選』（若森みどり・植村邦彦・若森章孝編訳）大月書店.
――― 2015『経済と自由―文明の転換』（福田邦夫・池田昭光・東風谷太一・佐久間寛訳）筑摩書房.
―――　n.d.［1909］「エルンスト・マッハ」（三苫民雄訳）http://thinkers.world.coocan.jp/pkmchess.htm（2017年12月29日閲覧）.
ポランニー＝レヴィット，K.・M.　メンデレ 1986「カール・ポランニーの思想と人生Ⅰ」（駒井洋・奥山真知訳）『経済評論』35（7）: 2–20.
松岡剛 1996「解説」松岡剛（編）『原典社会主義経済論争』ロゴス，pp. 201–213.
ラッツアラート，M. 2012『＜借金人間＞製造工場―“負債”の政治経済学』（杉村昌昭訳）作品社.
若森みどり 2011a『カール・ポランニー―市場社会・民主主義・人間の自由』NTT出版株式会社.
―――　2011b「贈与―私たちはなぜ贈り合うのか」橋本努編『現代の経済思想』勁草書房，pp. 87–112.
――― 2015『カール・ポランニーの経済学入門―ポスト新自由主義時代の思想』平凡社.
Arnold, T. C. 2001 Rethinking Moral Economy. *The American Political Science*

Review, 95（1）: 85–95.

Block, F. and M. R. Somers 2014 *The Power of Market Fundamentalism: Karl Polanyi's Critique*, Harvard University Press.

Cangiani, M. et J. Maucouorant 2002 Introduction. Dans K. Polanyi, *Essais de Karl Polanyi*, Seuil.

Dale, K. 2010 *Karl Polanyi*, Polity Press.

Graeber, D. 2009 Debt, Violence, and Impersonal Markets: Polanyian Meditations. In Ch. Hann and K. Hart（eds）*Market and Society*: *The Great Transformation Today*, Cambridge University Press, pp.106–132.

Harvey, M., R. Ramlogan, S. Randles（eds.）2007 *Karl Polanyi*: *New Perspectives on the Place of the Economy in Society*, Manchester University Press.

Humphreys, S. C. 1969 History, Economics, and Anthropology: The Work of Karl Polanyi. *History and Theory*, 8（2）: 165–212

Komoróczy, G. 1990 Karl Polanyi's Historical Utopia. In Polanyi-Levitt, K.（ed.）*The Life and Work of Karl Polanyi: A Celebration*, Black Rose Books, pp.188–191.

Maucourant, J., J.-M. Servet et A. Tiran 1998 Introduction générale. Dans J. Servet et al.（éds.）, *La modernité de Karl Polanyi*, L'Harmattan, pp. vii–xxxvi.

Mauss, M. 1924 Essai sur le don: Forme et raison de l'échange dans les sociétés primitives, *L'année sociologique*, nouvelle série 1: 30–186.

McRobbie, K. 2006 "Old, Badly Peeled, Half-raw Potatoes" and Peter F. Druckers Other Myths about Karl Polanyi. In K. McRobbie and K. Polanyi-Levitt（eds.）, *Karl Polanyi in Vienna*, Black Rose Books, pp.359–377.

Olivier de Sardan, J.-P. 1982 *Concepts et conceptions Songhay-Zarma: Histoire, culture, société*, Nubia.

Polanyi, K. 1968 *Primitive, Archaic, and Modern Economies: Essays of Karl Polanyi*, Beacon Press.

——— 2002–2005 *Chronik der großen Transformation*: *Artikel und Aufsätze 1920–1945*, Metropolis.

——— 2002 *Essais de Karl Polanyi*, Seuil.

Polanyi-Levitt, K. 2006 The Great Transformation. In K. McRobbie and K. Polanyi-Levitt（eds.）, *Karl Polanyi in Vienna*: *The Contemporary Significance of The Great Transformation*, Black Rose Books, pp.3–11.

Randles, S. and R. Ramlogan 2007 Corporate Merger as Dialectical Double Movement and Instituted Process. In M. Harvey, R. Ramlogan, S. Randles

(eds.), *Karl Polanyi: New Perspectives on the Place of the Economy in Society*, Manchester University Press, pp.254–280.

Rotstein, A. 1994 Weekend Notes: Conversations with Karl Polanyi. In McRobbie (ed.), *Humanity, Society and Commitment: On Karl Polanyi*, Black Rose Books, pp.135–140.

Stanfield, J. R. 1986 *The Economic Thought of Karl Polanyi: Lives and Livelihood*, Macmillan.